
魔法（ゆめ）香る街角の詩（うた）

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法^{ゆめ}香る街角の詩^{うた}

【Nコード】

N9397Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

隣の家に引越してきたのは、魔法使いの女の子だった。

1話分が短い、変な話の魔法もの(?)です。

第1話 隣人は魔法使い

「あつ、お隣、誰か引っ越してくるんだね」

幼馴染みの遥架はるかが言った。

この名前だと、どっちか判別できないかもしれないから言及しておくと、遥架は男の子だ。

私、美羽みはとは昔から大の仲よし。

家が隣同士の幼馴染みだから、当然といえば当然なのかもしれないけど。

今ではさらに、同じ高校に通う同級生でもある。

そんな私の家の隣 遥架の家とは反対側の隣の家に、なにやらトラックが停まって、次々と荷物が運び込まれているのが見て取れた。

この家は、随分と長いこと、空き家になっていたのだけど。ようやく住む人も決まったということか。

「そうだね。どんな人が住むのかなあ」

私が期待と不安が入り混じった声をこぼすと、すかさず遥架が言葉を重ねてくる。

「ヤのつく職業の方だったりして」

「ちよつと！ 怖いこと言わないでよ！」

まったく、遥架は……。

もっとも、遥架の意地悪発言はいつものことなのだけど。

「あつ、来たみたいだぞ」

遥架の声に従って視線を向けると、ひとりの女の子がこちらへと歩いてきていた。

そして隣の家　引越しの荷物が運び込まれている家の前で立ち止まる。

私たちの視線に気づくと、彼女は可憐な花が咲き乱れるかのような笑顔を振りまきながら話しかけてきた。

「こんにちは、隣の家の方ですかあ？　私、結音ゆいねっていいいますう。よろしくう」

なんだか、のんびりした感じの子だなあ。
それが私の第一印象だった。

「ヤクザじゃなくて、よかったな」

遥架が耳打ちしてくる。

ま、でも、それは確かによかった。

「だけど、親がヤクザとかって可能性も、ありえるかもしれないけどな……」

遥架はさらに耳打ちを追加してくる。

まったく、こいつは……。

それはともかく。

私は目の前の女の子をじっくりと観察してみた。

ぱつと見は幼いイメージだけど、おそらく私たちよりいくつか下中学生になるかどうかといったところだろうか。

ポニーテールにまとめた髪がさらさらと揺れているのが、とっても可愛らしさを助長している。

しかも、にこにこ温かい笑顔を向けてくる様子を見るに、地上に舞い降りた天使かとも思えるほど。

……というのは、さすがに言いすぎだろうけど。

ただ少し気になるのは、ご家族の姿が見当たらないこと。

先にこの結音ちゃんって子だけ来て、他の人はあとから来るのだろうか？

私が質問してみると、思いがけない言葉が返ってきた。

「あたし、ここにひとりに住むの〜！」

結音ちゃんはおくまでにごやかに、さらっと答えてくれた。

まだ中学に入るか入らないかくらいの歳みたいなのに、ひとり暮らしだなんて。

「大変ねえ……」

私は思わずつぶやいていた。

「うん〜。頑張って魔法を使わないとお〜」

『えっ!?!?』

私と遥架の声が重なる。

今……なんとおっしゃいましたか？

「あ……秘密だったんだ〜、言っちゃったあ、てへ あたし、魔

法使いなの。でもこれって、秘密だからあゝ、誰にも言わないでね〜！ 約束よあゝ！」（にこお）

結音ちゃんは、やっぱり花のような笑顔を振りまきながら、そんなことをたまった。

私と遥架は、黙って頷くことしかできなかった。

……隣人は、もしかしたらヤクザよりも厄介な人なのかも……。

とはいえ、楽しくはなりそうだ。

ちよつと現実逃避気味にはあったけど、私は前向きに考えることに決めた。

第2話 K

にゃーにゃー。

騒がしい鳴き声で目が覚めた。

学校へ行く準備をして外に出てみると、なぜか猫の大群がびっしりと結音ちゃん家の前の道路を覆い尽くしていた。

な……なんだこれ……？

「あつ、おはよお〜」

そんな猫たちに囲まれていたのは、もちろん結音ちゃんだった。まあ、他にありえないとは思ったけど。

それにしてもこの子、またたびの匂いでもふり撒いてるの？

……つて、やばい！ 遅刻する！

猫で覆い尽くされている現状つても気にはなっただけ……。結音ちゃんは魔法使いらしいから、魔法でどうにかするでしょ。

「おはよう、結音ちゃん！ でも私、急ぐから！ またね！」

軽く挨拶を残して、私は遥架の家のチャイムを押す。

私が迎えに行かないと出てこないのだ、遥架は。

それで遅刻したことが何度あったことか……。

「おはよう、美羽。……あれ？ 結音ちゃん家の前、猫が」

「今はそれどころじゃないわ！ 学校まで走るわよ！」

「お……おっ……」

慌ただしく走って登校するの、ごくありふれた光景だ。

そして放課後。

いつものように、私は遥架と一緒に下校してきた。

「そういえば、今朝のつて……」

「猫だったわよね。何十匹もいたような気がする……」

「じゃあ。」

家の前まで着くと、やっぱり猫はいた。

でも、朝とは違って1匹だけだった。

「黒猫だね」

「そうね」

しかもその猫は、結音ちゃんの足にべったりとすり寄っている。

「あつ、おかえりい〜」

猫にすりすりされたまま、結音ちゃんが満面の笑みで私たちを出迎えてくれた。

「なつかれてるわね」

「うん〜。どうしよあ〜、困ったなあ〜」

全然困っているようには思えない口調だったけど。

「まあそれだけなつかれてたら、飼うしかないだろ。魔法使いといえ、やっぱり使い魔の黒猫ってのが基本だし」

遥架がきつぱりと言つてのける。

いや、まあ、そうかもしれないけど……。

「うん、そうだね」

どうやら結音ちゃんも納得したようだ。

って、あっさり納得しちゃうんだ……。

そりゃあ、なついている猫を放り出すっていうのも可哀相だし、
飼うことには賛成だけど。

……結音ちゃん、ひとり暮らしなのに、大丈夫なのかな……。
私が餌代とか世話とかに関して心配しているというのに、結音ちゃん
と遥架はまったく気にする様子もなく、使い魔として飼う方向
で話は進んでいるようだった。

8

「それじゃあ、名前をつけてあげないとな」

「名前……うん、決めた！ 『ねこ』」

「そのままじゃん！」

さすがにこれは、あまりにもひどい……。

「もうちょっとちゃんと考えようね！」

「じゃあ、く」

「黒いからクロなんてのも却下ね」

「う……」

凶星だったらしい。

考え込む結音ちゃん。

「決めた！ Kで！」
「アルファベット!？」

とは思ったものの、まあ、まだマシかな、と結論づける。というわけで、命名『K』と相成りました。

実際のところ、KUROの頭文字でKだったみたいなのだけど。

「それじゃあ、行こう、Kちゃん！」
「あいじゃ！」

結音ちゃんの言葉にはつきりと答え、Kはしっかりと2本足で立ち上がったK……。

そのまま結音ちゃんに続いて、家の中に入って行ってしまった。

呆然と立ち尽くす私。

うん、まあ、見なかったことにしよう……。

隣に立っている遥架も、「今日の晩ご飯はなにかなあ」と、現実から目をそむけているようだった。

第3話 たんぼぼの綿毛

暖かな春の日差しの中、私はいつものように遥架と一緒に歩いていた。

ふと目の前を白い影がよぎる。

「綿毛だ」

学校帰りの野道。

たくさんのたんぼぼが綿毛を飛ばす。

もう、そんな季節になっていたんだ。

「綺麗……。こうやって、どこまでも遠く飛んでいくのね」

「まあ、限界はあるだろうけどな。アメリカにまで飛んでいけたら、すごいけどなあ」

「巨大な綿毛なら行けるかもしれないよ？」

とまあ、いつものごとく他愛もない話をしつつ歩いていると。

「なんだ、あれ？」

遥架が不意に空を指差す。

そこには見慣れぬ巨大な物体　白くてもこもこした物体が……。あれって、見るからに……。

「巨大綿毛!？」

そう。

まさにたんぼぼの綿毛、といったような見た目の、だけど直径は

優に数十メートルはあるつかという物体が、上空にぶかぶかと浮かんでいたので！

なにやら、遥架がじとじとした視線で私を睨んでくる。

「美羽があんなこと言うから……」

「そ……そんなわけないでしょ！ ……たぶん……」

否定はしたものの、ちょっと自信がなくなってくる。

結音ちゃんが隣に引越してきてから、おかしい出来事を何度か目撃している。

そのせいで、私自身もおかしなことを引き寄せる体質になってしまった、というのも、ありえない話ではないのかもしれない。

なんて、バカな考えまで浮かんできていたからだ。

周囲には野次馬の数も増えてきた。

どうやら、幻覚とかがつてわけでもなさそうだ。

と、そのとき。

聞き慣れた声が響き渡る。

「すみません、通してください！」

相変わらずのんびり口調の結音ちゃんが、人波をかき分け、巨大綿毛のほうに向かって駆けていった。

そして。

おもむろに取り出した、先端に星の飾りがついた杖みたいな物を振りかざす。

「えいつ！」

杖の先端からキラキラした光が放たれ、辺り一面に満点の星空のように広がっていく。

無数の光に包まれた巨大綿毛は、一瞬にして普通の大きさの無数の綿毛に分裂し、そのまま空へと舞い上がっていった。

「おお~~~~！」

歓声上がる。

青空に映える、無数の真っ白い綿毛。

それはとても幻想的で、美しい光景だった。

でも。

結音ちゃん、魔法のことって秘密じゃなかったの……？

家に戻った結音ちゃんにそう指摘してみたら、案の定、彼女は慌てふためいた。

第4話 でんでんむし

じとじと雨模様。

今日も今日とて、私は遥架と一緒に歩いていた。
傘を差して寄り添い歩く。

せつかくだから、傘を忘れたとか言っただけであいあい傘でもすればよかったかな。

だけど私が毎日折りたたみの傘をカバンの中に常備しているのを、遥架も知ってるし……。

ぼんやり歩いていると、梅雨どきの風物詩が目に飛び込んできた。紫色の花が鞠のようにまとまり、しっとり降り続く雨に濡れて、なんとなく寂しさを訴えかけてきているように感じられる。

そんなあじさいの葉っぱの上に、ぺったりと張りつく一匹の虫の姿を見つけた。

「あつ、かたつむりだな」

「かたつむりって、どうして、でんでん虫っていうのかなあ？」

「そりゃあ、電電虫っていうくらいだし、電気をバチバチ放つからだよ。怒らせると触角から小さな雷みたいに放電し始めるから、注意しろよ」

また遥架が適当なことを言い出す。

「あのねえ、そんなわけないでしょー！」
「そうですよお〜」

不意に新たな声加わる。

神出鬼没な結音ちゃんが突然現れて、会話に加わってきたのだ。最近はいつもこんな感じだから、すでに慣れてしまっているのだけだ。

「まったく、電気だから電電虫だなんて、遥架はおかしいわよねえ？」

「うん、そこは合ってるよ。違ってるのは、触覚から電気を放つってところだよ。実際には触角が避雷針みたいになって、雷の電気を吸収しちゃうの。」

そ……そうだったのか！

かたつむりって、奥が深い。

ん……？ あれ？ でも……。

「雷のエネルギーってすごく大きいんだよね？ かたつむり、あんな小さな体だけど、雷なんて吸収しちゃって大丈夫なの？」

「まあ、吸収できるようになってるってだけで、まずありえないんだけどね。でももし吸収したらどうなるかということお……。」

結音ちゃんがそう言った途端。轟音が響く。

雷が鳴りはじめたのだ。

う、嫌な予感……。

そして当然のごとく、その予感は当たってしまっ。

ピカッ！ ドオオオオオオン！！

凄まじい閃光と爆音が瞬時に襲いかかってくる。

なんと、目の前のかたつむりに雷が落ちたのだ！

こんな至近距離で私たちにはまったく被害がなかったのは、本当に結音ちゃんが言ったみたいに、かたつむりの触覚が避雷針の役割

を果たしたということなのだろうか。

そして。

「こつなるの」

なぜか笑顔の結音ちゃんと、呆然とする私と遥架の目の前で、かたつむりは、見事に巨大化していた。

体長10mくらいの巨大なかたつむりが、町中に現れたという現状。

先日の巨大綿毛のときと同様、またもや野次馬が集まってくる。

すちやつ！

結音ちゃんがどこからともなく取り出した杖を振りかざす。

「えいっ！」

やけにのんびりとした動作と声で杖を振ると、その先端から針金みたいなものが伸び始めた。

針金の片方の端は、かたつむりにぶすつと刺さる。

そしてもう片方の端は地面に突き刺さる。

バチバチバチッ！

針金を伝って、かたつむりから地面へと電気が流れ始めた。

派手な音と光が針金を中心に放たれ、まるで花火のようにも見える。

野次馬たちから大きな歓声が沸き上がる。

やがて、かたつむりはもとの大きさに戻った。

「つまり、針金がアース線の役割を果たしたと」

遥架が解説を入れる。

それにしても……。

「魔法、秘密でしょ？」

「あ……そっかあ。また忘れてたあ。てへっ」

結音ちゃんがどうして魔法を秘密にしなければならぬのか、詳しく聞いていないから知らないけど。

はたして、こんな状態でいいのだろうか……。

第5話 梅雨

じめじめじめじめ。

梅雨だから仕方がないけど、これだけ雨ばかり続くと気が滅入ってくる。

「そいえば梅雨って、梅の雨って書くのはどうしてなのかなあ？」

「そりゃ梅の味がするからだよ。美羽、飲んでみな」

と、いつものごとく適当な遥架。

「あんたは、また……。そんなわけないでしょ？」

「そうですよ」

いつもどおり、結音ちゃんがどこからともなく現れ、会話に紛れ込んできた。

結音ちゃんの神出鬼没ぶりにも、もう完全に慣れてしまった私たちには、ツッコミを入れたりもせず平然と受け入れる。

……諦めている、と表現してもいいかもしれない。

どうでもいいけど、魔法使いって、ワープとかもできるのだろうか。

それはともかく、会話に加わってきた結音ちゃんは、さらに驚きの言葉を口にする。

「正解は、梅干しが雨のように降るからですよ」

……… いったい、なにを言い出すのやら。

「あのねえ、結音ちゃん。そんなの、見たことないよ?」

結音ちゃんにも、遙架の適当ぶりがうつってしまったのだろうか。もつとも、もつともから結音ちゃんはちょっと、というかかなり、というかすさまじく変なのだけだ。

と。

ばらばらばら……。

なにやら雨音が変わった。

そして視線を向けてみれば、地面に当たって音を立てているのは大粒の雨なんかではなく、赤い塊で……。

ほんとに梅干しが降ってきてるし!

「ね?」

「本当だったでしょ? とでも言いたげに微笑みを見せる結音ちゃん。」

「ちょっと! この梅干し、魔法で出したんじゃないの!?!」

さすがに食ってかかる。

いくらなんでも、冗談のために魔法を使うなんて、と思ったからだ。

「だけど、結音ちゃんはきょとんとした顔を返してくる。」

「え、違うよ。あたしは変なことを抑えるために派遣されたんだから。そういうことしたら、怒られちゃうんだよ。」

……いったいどこから派遣されたというのだろうか……。
でもそれが本当なら、別のツッコミも浮かんでくる。

「だったら、この雨ってどう考えても変なことでしょう？ どうにかしてよ！」

「え〜？ これは自然現象だから、無理だよ〜」

私の言葉に、結音ちゃんは平然と言い放つ。

「それに〜、魔法を使うと疲れるし〜」

続けられたばやし声は、私を脱力させた。

……結音ちゃん、単に魔法使うと疲れるからって理由で逃れようとしてるんじゃない……。

とはいえ、私にはそれを確認するすべはない。

隣に並ぶ遥架も、いつものように「今日はいい天気だな〜」「なんて言って現実逃避してるし。」

思いつきり梅干しの雨が降りしきっているというのに……。

梅干しの雨は、結局深夜まで降り続いた。

第6話 雨々……

雨はまだ、じとじと降り続いていた。

「梅雨とはいえ、鬱陶しいなあ、もう」

「晴れたら晴れたで、暑いって言うくせに」

すかさず遙架からのツッコミが入る。

「ま、そうだけどね」

じめじめは気分にも反映されてしまうもの。

私には反論する気力すらない。

「でもさ、さすがに長すぎだよ。2週間以上降り続くなんて……」

などと話をしていた私たちだったのだけど。

それからさらに2週間が経った今……。

「だーっ！ 1カ月も降り続くなー！！」

思わず叫びたくもなってくるというものだ。

梅雨のしとしと雨とはいえ、これだけ長く続くと、道には水が歩けないくらいにまで溜まってしまっている。

そのおかげで学校が休みになっているのは、嬉しい部分だったりするのだけ。

「そんなにイライラしつくなよ」

毎日しっかりと遊びには来る遙架にそう言われる。

場所は私の部屋。

幼馴染みだから、お互いの部屋になんて何度も行き来している。

それにしても。

「叫びたくもなるよ。雨ばかりだと洗濯物もなかなか乾かないし……」

「ずっと家の中にいるんだし、大して困らないんじゃないか？」

「洗濯物が乾かないとね……無類の洗濯好きなお母さんが私に八つ当たりしてくるのよ！」

「そ、そうなのか……」

そうなのだ。

お洗濯ができないなんて、むき〜！ と叫んでばかばか殴られ続ける私の身にもなってもらいたいものだ。

軽く叩かれる程度だから、虐待とかそんなんじゃないけど。

とはいえ、それだけが原因というわけでもない。

やっぱりこれだけ雨がずっと、気分までもじめじめしてしまうのは避けられない。

「そんなときはあ〜」

と、ここで結音ちゃんが、いつもながら唐突に登場。

ここは私の部屋だけど、それは大した問題ではないのだろう。なんとって、魔法使いなんだから。

「なにかいい方法があるの？」

ワラにもすぐる思いで問いかけてみる。

「そんなときはねえ〜、笑えばいいのよお〜。気分が晴れると天気も晴れるよ〜」

んなばかな……。

でも、結音ちゃんの言うことだし、もしかしたら……。

「あははははっ!」

笑ってみる。

「はははははっ!」

遥架も笑う。

「えへへえ〜」

結音ちゃんも笑う。

「にやははははっ!」

猫のKまで笑ってるし……。

結音ちゃんの使い魔みたいなもんだから、Kも一緒に部屋の中に入ってきてたのね。

ともかく、そんな3人と1匹の笑い声が響き渡ると、窓の外はすぐに明るくなっていく。

「うあ、ほんとに晴れた……」
「ね？」

嬉しそうに微笑む結音ちゃん。

……いつも思うけど、ここ最近いろいろと妙なことが起ってるけど、実は全部結音ちゃんの仕業ってことはないよね……？
真相は本人にしかわからない……。
もちろん、訊いても答えてなんてくれないのだけど。

第7話 きのこ

長々と続いた雨も終わり、暑くなる……かと思いきや。

「霧だな……」

「霧だねえ……」

今度は濃い霧がもうもうと渦巻く状態になっていた。

雨が上がったことで、学校は再開され、今は放課後の帰り道だ。

「暑くないのはいいけど、じめじめはやだなあ。きのこが生えてそ
うだよ」

ぴよこつ。

……なんだ？ 今の音……。

恐る恐る手を頭の上に伸ばしてみる。

「ほんとに生えたな」

私の頭から、しつかりときのこが生えていた。

手で触ったあと、念のため鏡でも見てみたけど、頭から生えてい
る物体は紛れもなくきのこだった。

遥架が、すっと手を伸ばしてくる。

そして。

「痛たたたた！」

いきなりきのこを引っ張られた。
私の頭に激痛が走る。

「完全に根づいてるな、これ」

うつうつ、どうしてこんなことに……。

「学校があるのに、こんな姿になるなんて……」

「ま、仕方ないだろ」

遥架はなにやら楽しそうだ。

まったく、他人事だと思って……。

「どうして私だけなのよ〜！」

「日頃の行いってやつだな」

ぴょんっ。

……。

「遥架の日頃の行いも悪いのね。メモメモ」

思わず笑いそうになる。

頭にきのこを生やした遥架は、明らかに不満顔だった。

「で、どうしてきのこ生えたか、だな。まあ、霧が怪しいとは思っ
けど」

「他にないよねえ……」

「みんなお揃い」

結音ちゃんだ。相変わらずの神出鬼没ぶり。もちろん頭にはきのこがびよこつと生えている。

「魔法でどうにかしないの？」

「ん、魔法干渉がかかっているから無理みたい」

「干渉……ってことは、悪い魔法使いが怪しい儀式をしてるとか……？」

「ちよつと探ってみる」

結音ちゃんは杖をかざすと、私たちを先導して歩き始めた。

「ここであ」

着いた場所は、工場らしき建物。どうやら、きのこ工場のような中からおじさんが出てくる。

私たちが霧のことについて尋ねると、素直に答えてくれた。

「ああ、すまない、霧が流れ出てしまつて止まらなかつたんだ」

研究用にきのこが生えやすくなる魔法の霧を使っていたのだそうだ。

「しょうがないなあ」

結音ちゃんは、ぱぱつと杖をひと振り、霧は一瞬にして晴れた。魔法干渉とやらは、どうなったんだろう？

と、それよりも問題なのは……。

「ちょっと、きのこ、消えてないよ？」

「うん……。数日は残っちゃうみたい」

あっさり言っただけの結音ちゃん。

『そんなあ……』

私と遥架の声は、綺麗に八モるのだった。

第8話 猫使い

「遅刻する〜！」

相変わらず、遅刻ぎりぎりに登校する私。

「でも、魔法使いって結構居るのかな？　きのこのおじさん、普通に魔法使いだってバラしてたよね」

「ひとり見かけたら、30人いると」

一緒に走る遙架が言う。

「ゴキブリじゃないんだから……」

どんなときでも、雑談はかかさないふたりだった。

そして、つまらない授業は終わり、ようやく放課後。

「そいやあ、結音ちゃん。この学校の中等部に転入したんだってな」

「あっ、そうなんだ。知らなかった〜」

うちの学校は、中等部と高等部が一緒の敷地に入っている。

ちなみに私と遙架は高等部の2年生だ。

「あっ、噂をすれば……」

中等部のほうに人だかりができているのを目にする。

その中心にいるのは、間違いなく結音ちゃんだ。

「人気者になってるね」

「いや、人気なのはどうかやら、もう1匹のほうみたいだぞ」

よく見てみると、確かに黒猫のKも一緒だった。

しかも。

「2本足で立って、言葉も喋ってるみたいだな」

「魔法が秘密っていうのは、どうなったのかな……」

「うーん、どっちかっていうと、猿回し的な感覚で見られてるのかもしれないけどな」

そう言われて観察していると、Kに「反省」のポーズなんかまでさせているようだった。

「ま……まあ、それでクラスメイトと仲よくやっていけるなら、いいよねっ！」

「おひねりとかを強要したりしなければな」

……しそつで怖いかも、と私は思った。

第9話 木くらげ

夏休みになるやいなや、やたらとはしゃぎ始める人がいる。

遥架がそうだ。

私は暑いのが苦手だから、できれば外になんて出たくないのだけ
ど……。

まあ、遥架がはしゃいでる姿を見るのは好きだから、仕方ないな
〜と思いつつもこうしてついてきていたりするわけで。

「おーい、美羽〜！」

嬉しそうに手を振る遥架に、苦笑いを浮かべつつ手を振り返す。

どうでもいいけど、高校生にもなって木登りなんてするかなあ…
…。

男っていくつになっても子供なのかも。

私は木陰に座って、木の枝の上につかまっている遥架を見上げて
いた。

それにしても、かなり登ったなあ……。

もし落下したら、さすがにちよっと危険がありそう。

「遥架〜、気をつけてね〜！」

「大丈夫だよ〜！」

……と、枝のところどころでなにか光ったような……？

「遥架！ 足もと！ 気をつけて！」

不安になった私は、思わず立ち上がって叫ぶ。
それが悪かったのかもしれない。

「わっ！」

バランスを崩し、遥架が真っ逆さまに落下してしまった。

「遥架〜!!」

どさっ！ と大きな音を立てながら、遥架は下の茂みに落ちた。
心配して駆け寄る私の顔は、きつと真っ青になっていただろう。

「遥架！ 大丈夫っ!？」

「痛ててて……。ま、まあ、大丈夫みたいだ」

「ふう〜、よかった……」

でも……。

「なんだっただら。遥架の足もとに、一瞬なにか見えたよ？」

「う〜ん、足が滑ったんだよな。なんか、ぬめっとしたのを踏んだ
ような感じだったけど」

「それはあ〜、木くらげだよ〜」

また出た！

結音ちゃん、今日はノースリーブのワンピースと麦わら帽子にア
イスキャンディと、完璧に夏のいでたちだった。

「木くらげ……っ、きのこ〜?」

「それとは違ってえ、生物だよ〜」

「えっ!？」

結音ちゃんいわく……どうやら、木の上にはたくさんの透明な生物が生息しているらしい。

そのうちの一種、木の上を好むくらげのような透明生物なのだそうなの。

「結音ちゃん、これって変なことだと思うけど、魔法でどうにかしないの？」

いつもどおりの答えしか返ってこないだろうな、と思いつつも問いかけてみると。

「透明だから気づいてないだけで、世界各地にいるんだよ。だから変じゃないよぉ〜！」

……世界中の皆様、木登りの際には、木くらげにくれぐれもご注意を……。

第10話 花火

ドーン！ ドーン！

「やっぱり花火は綺麗ね〜」

私の済む町では、この時期は毎年、河原での花火大会が大々的に催されることになっている。

「そうだな。かなり盛大だし。あまり大きくもない、こんな町のイベントなのに……」

「こんな町は余計よ！」

つまらないツッコミを入れる遥架に一喝。

まったく、興ざめさせないでほしいものだ。

それはともかくこの花火大会、遠くからわざわざ見に来る人も含め、かなりたくさんの人が集まってくる。

この町が一年で一番活気づく日と言えるかもしれない。

「しかしまあ、綺麗だけど、もっと意表をつく爆発の仕方でもいいのにな。ピカ ユウ型とかなら子供たちがさらに喜びそうだ」

また遥架が無茶なことを言い出す。

「そういうことなら〜、私に任せてえ〜」

出たっ！

颯爽と現れた結音ちゃんは、杖を振りかざして、怪しげな呪文を

唱え始める。

ぱあああああ！

光が空一面を包み、そして。
風を操ったのか、花火は様々な形へと変貌を遂げていく。

ピカ ユウ型とかドラ もん型とかサザ さん型とか……。

確かに観客は大喜びしてるけど。
花火師さんたちはさすがに焦ってるんだろうな……。

「なんだこれは!?!」

「予定してたのと全然違うぞ!」

やっぱり、混乱してるよ……。
と思ったら。

「まつ、いいか!」

「そうだな! 楽しいし!」

……。

私の町の人たちは、変わったことが起こる現状にすでに慣れてしまっているのかもしれない……。

ま、これはこれで楽しいからいいかな。

そんなふうを考えている私も、どうやらの町に毒されたうちのひとりのようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9397y/>

魔法（ゆめ）香る街角の詩（うた）

2011年12月4日22時55分発行